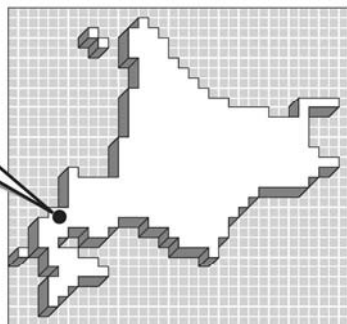


連載 わがマチの自慢 No.23

蘭越町

安定した米づくりを
未来に引き継ぐおいしいお米と
温泉と花のまち

蘭越町は北海道南部に位置する、米と温泉と花のまちである。周囲をニセコ連峰等の山々に囲まれ、町の中央部を清流日本一で知られる道南最大の河川「尻別川」が、多くの支流を集めて西へ流れ、日本海に注いでいる。尻別川流域に広がる平坦で肥沃な土地、豊かな水、温暖な気候は稲作に適しており、おいしい米の産地として知られてきた。バラエティに富む七つの温泉郷を有する温泉の町でもある。「ニセコ観

光圏」として、近年外国人観光客の増加の著しい倶知安町、ニセコ町とともに、このエリアの多様な観光資源を活用して、観光客が滞在・周遊できる魅力ある観光地づくりを進めている。蘭越町は奥ニセコ地域として、他の地域とは異なった魅力の発信に努めている。一〇月には倶知安町でG二〇観光大臣会合が開催されることになっており、ニセコ地域の魅力を世界に発信する機会ともなる。

花いっぱいのまちとしても知られ、花いっぱい会の会が中心となり、町内の花壇を整備する

運動が続けられている。役場周辺やコミュニティプラザ花一会周辺などの花壇の植え込み作業や自宅の花壇整備に熱心に取り組んでいる。八月上旬には、町民を対象に町内の花壇を巡るバスツアーが行わ



役場庁舎前の立体花壇

れているほか、公共施設の花壇や了解が得られた個人の花壇を紹介する「町内美化花壇マップ」が宿泊施設や道の駅等で配布されている。

明治三二年に尻別村から分村して南尻別村戸長役場が置かれたのが町の始まりで、昭和二九年の町政施行に伴い蘭越町と改称した。今年は開基一二〇年に当たる。

農業の概要

蘭越町の耕地面積は四千haで水田面積が七割を超えている。二〇一五年農林業センサスによると農業経営体数は二六六経営体、販売農家数は二五八戸で、一〇年前に比べる

と三割近く減少している。販売農家一戸当たりの経営耕地面積は一一・一haである。

基幹作物は水稻であり、早くから品質や食味を重視した生産に取り組んできた。平成三〇年産の作付面積は一、七

表1 蘭越町における米生産の状況

区 分	単位	昭和60年 (1985)	平成7年 (1995)	平成17年 (2005)	平成27年 (2015)
生産 状況	水稻作付面積	ha	2,610	2,380	1,880
	10a当たり収量	kg	530	502	549
	収 穫 量	t	13,800	11,900	10,300
農業 産出額	米	千万円	398	292	181
	割 合	%	83.5	75.7	66.1
	(参考) 野 菜	千万円	25	42	55
	割 合	%	5.2	11.0	18.3
	総産出額	千万円	477	386	274
参考：米の年間1人 当たり消費量（精米）		kg	74.6	67.8	61.4
				61.4	54.6

資料：農林水産省「作物統計調査」「市町村別農業産出額」「食料需給表」

八〇haで、品種は「ななつぼし」が五割強、「ゆめぴりか」が三割弱で、他に「ほしのゆめ」「おぼろづき」「きらら397」「きたくりん」などが作付けされている。米の産出額（平成二九年産）は二〇億二千万円で、農業産出額（三一億三千万円）の六五%を占めている。

米をめぐる消費の環境や国の政策が変わってきている中で、生産量の多い産地ではないが、良質米の生産にこだわりの持つ稲作を中心に、メロン、トマト、イチゴ、アスパラガスなどを振興作物として作付けを推進し、複合化を進めている。

らんこし米ブランドの飛躍をめざして

蘭越産の米はかねてから食味が良いとの評価を得ていたが、全道でタンパク仕分けが始まって、蘭越産の米はタンパク含有率が低いことが分かり、食味の良さが裏付けられてきた。

らんこし米のブランド化をさらに推進していくためには、有利販売のための組織や体制の整備が十分でないこと、栽培方法や販売方法に統一的な基準が定められていないことが課題として関係者から挙げられていた。

このため、蘭越町米麦改良

協会では昨年一〇月に「らんこし米栽培ガイドライン」を策定した。このガイドラインでは、①「らんこし米」を育む自然への感謝と、環境に優しい農業の推進、②「高品質・良食味」の維持向上のための



一五か条の徹底実践、③「安全・安心の米づくり」に向けた六か条の徹底実践、④日々の栽培技術の研鑽・向上と基本技術の励行や土壌条件に合わせた適切な肥培管理の実践などによる、最高に美味しい

「らんこし米」の生産、の四つの取り組みを「らんこし米」に携わるもの全ての共通理念とした。

「高品質・良食味」の維持向上のための一五か条では、収量より品質を最優先した米作りとするための目標収量の設定、土壌診断に基づいた適正施肥の実践、病害虫発生予察による適確な防除、試し刈りによる玄米判定

に基づく適期収穫、玄米タンパク含有率は六・八％以下を目標とするなどの項目が、「安全・安心の米づくり」に向けた六か条には、農業環境規範の順守や化学合成農薬・化学肥料の使用量の五割以上の削減、生産履歴の記帳、GAPの推進などの項目が挙げられている。

こうした項目の多くはこれまでも、栽培基準や生産目標として取り組まれてきたが、顧客ニーズに沿った米作りを続けるため、改めてガイドラインとして提示し、生産者・関係者が一丸となって実践することにより、「らんこし米」ブランドの更なるレベルアップを図ろうとするものである。

九回目を迎える 「米ー1グランプリ」

蘭越町で毎年恒例となっている大会がある。日本一美味しい米を決める「米ー1グランプリ in らんこし」である。

この大会は、平成二〇年と二一年に山形県、福島県で開催された全国規模の米コンテストで、蘭越町の生産者が優秀賞と金賞を受賞したことを受けて、生産者の間から「蘭越町でも米コンテストを開催したい」との気運が高まったことが開催のきっかけとなった。主催は、生産者やJA、農業委員会、土地改良区、民間集荷業者、観光協会、商工会、

建設協会、町役場などで構成する米ー1グランプリinらんこし実行委員会（事務局は役場農林水産課）である。実行委員長は米生産者が務める。

今年で九回目を迎え、一〇月二八日から十一月五日まで予選審査が、十一月二三日に決勝大会が行われることになっている。

第八回大会の状況

昨年の第八回大会では全国から二九〇品の出品があった。産地別に見ると、北海道が最も多い一九四品で、うち蘭越は三六品、岐阜県が二〇品、静岡県が一〇品、山形県と新潟県がそれぞれ九品と続き、

九州からの出品もある。品種別には「ゆめぴりか」が一〇八品、「ななつぼし」が五二品、「コシヒカリ」が三七品と続く。

●三〇品に絞る

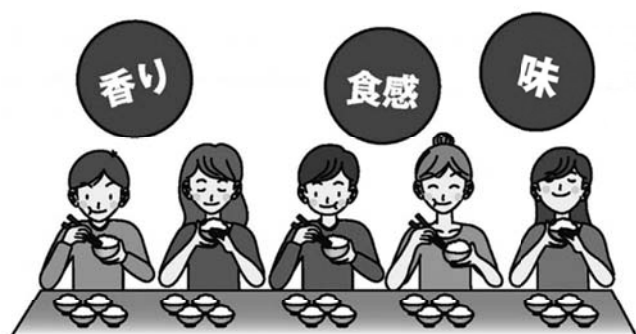
予選審査

予選審査は、全国の調理専門学校やクッキングスクールなど食に携わる学校や米の専門店など三五の学校等の協力を得て行なわれた。

出品米を無作為に五品を一グループとする一六グループに分け、東・北日本の学校等と南・西日本の学校等で審査を行った。一つの出品米は必ず東・北と南・西の学校等で審査されるようグループ分

けしており、審査側には産地や出品者、品種等の情報は伏せられている。

各学校等では、五名の審査員を選定し、味・香り・食感等を総合的に審査して美味しかったものから順に一位から



三位までを選定、各校は各審査員の審査表を実行委員会に送付する。実行委員会では、

出品米ごとに東・北と南・西の一〇名の審査表を、一位は三ポイント、二位は二ポイント、三位は一ポイントとして集計する。すべてを集計して

上位三〇品を選び決勝大会進出とした。内訳は府県産が五品、北海道産が二五品、うち蘭越産五品である。なお、予選審査表の内容はすべての出品者にお知らせしている。

●トーナメント方式の 決勝大会

消費者にもPR！

決勝大会は十一月一七日、蘭越町に三〇品とその生産者

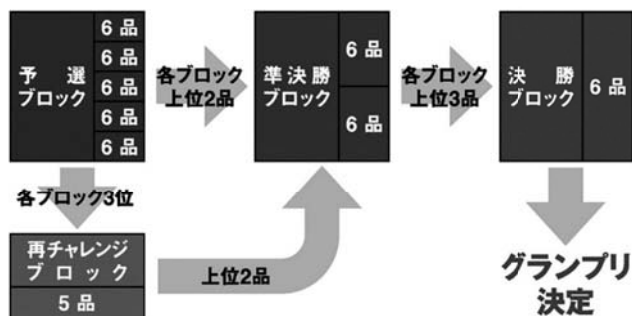


図1 決勝大会における審査の模式図

が集結して行われた。

審査は、学識経験者等の特別審査員八名と、全国から公募した審査員六名の計一四名による官能審査（食べ比べ）によって行われ、予選ブロック、準決勝ブロック、決勝ブ

ロックとトーナメント方式で競われる。審査はブロックごとに行われ、審査員は味・香り・食感等を総合的に審査して一位から三位までを決定。各審査員が選んだ順位を合算集計して上位勝ち上がりとした。勿論審査員には品種名、産地、生産者名は伏せられている。なお、炊飯するのに大事な水加減は出品者が自ら決めている。

予選ブロックは三〇品を五ブロックに分けて行われ、それぞれのブロックで一位から三位までを決め、各ブロック二位までの一〇品は準決勝ブロック進出とした。各ブロックで三位となった五品については再チャレンジブロックと

して再度官能審査を行い、上位二品を準決勝ブロック進出とした。進出したのは、府県二品と北海道一〇品の計一二品で、うち蘭越四品である。準決勝ブロックは一二品を二つのブロックに分けて審査し、各ブロック上位三品、計六品が決勝ブロックへ進出した。すべて北海道産で、蘭越産が二品であった。

最後の決勝ブロックでは六品による審査を行って、最終的にグランプリ一品、準グランプリ二品、金賞三品が選ばれた。

この決勝大会は一般の消費者にも開放されており、町内外からの多くの来場者で賑わった。来場者はすべての出品米を試食できるほか、米の重量当てゲーム、全国の銘柄おにぎりや豚汁の試食、餅つき、



昨大会のグランプリ・準グランプリ・金賞受賞者

お米に関する〇×クイズなどが行われ、大人から子供まで幅広い世代に米をPRした。

こうした大変な大会の運営を実行委員だけではなく、農家の女性らや商工会女性部、食生活改善協議会など多くの町民が支えている。

グランプリ開催の効果

らんこし米はこれまでのすべての大会で決勝ブロックまで進むことができ、グランプリ受賞三回、準グランプリ受賞四回という好成績をあげている。こうした結果は、良質米産地として誇りの醸成や栽培技術の向上、技術改善など

良質米生産に向けた生産者や関係者のモチベーション向上につながっている。

大会の開催は多くのマスメディアにも取り上げられ、道内はもとより、道外からも問い合わせがあるなど、らんこし米の知名度は着実にアップしてきた。また、食味が確実に向上した北海道米を、多くの消費者に知ってもらった大会でもある。

らんこし米の振興施策

米づくりにかける蘭越町の施策で極めて特徴的なのは、町直営の育苗施設の運営が続いていることである。農家の



育苗施設（下は増設施設）

育苗作業を軽減し、水稻とトマトやメロンなどの複合経営を育成して所得を確保しようとする町が設置したもので、平成九年産から、育苗マットで一四万枚、作付面積換算で四〇〇ha規模の施設としてスタートした。一四年度にはさらに、育苗マットで七万枚、作付面積二〇〇ha規模の施設を増設した。この増設を機会に温湯消毒機を導入し、既存施設の分を含めて、育苗施設で使う種籾はすべて温湯消毒を行っている。

今年は七二戸の農家が生産し、育苗マット二二万四六〇三枚、面積換算で六四一・七haとなり、水稻（主食用）作付面積の四割近くをカバーし

ている。品種は「ななつぼし」「ほしのゆめ」「ゆめぴりか」「おぼろづき」の四品種である。施設に対する生産者の信頼は厚く、毎年、施設の生産能力を超える要望がある。

来年産からは、床土の代わりにロックウールマットを使用することになっている。ロックウールに換えることにより苗箱の重量が従来の半分となり、運搬労力が大幅に軽減される。このほか省力化に向けた試みとして、苗箱数を減らせる「密苗栽培」の試験を継続して実施している。

また、温湯消毒機の導入により種子消毒に使っていた農薬が削減できることもあって、同時期からイエス・グリーン

米や特別栽培米の生産拡大のための支援を始めており、取組面積は当時の約一七〇haから昨年は約六六〇haまで拡大してきた。

他にも、前述の米ーグループの開催、ケイ酸資材購入費への助成、農業普及指導員の配置、出来秋のらんこし米テレビコマercial放映などの事業を予算措置しており、高品質で安全・安心な米産地として更なる発展に努めたいとしている。

新規就農や 野生鳥獣害対策

蘭越町では、農外からの新規参入者をトマト生産で迎え

入れようと、平成二五年にトマト栽培ハウスを備えた研修農場を設置し、第Ⅰ期の研修生を四戸受け入れた。Ⅰ期生は二七年に全戸就農、Ⅱ期生からⅣ期生までは一戸ずつ研修し、この春までに七戸九人が町内に就農している。現在、Ⅴ期生の応募がなく研修農場は利用されていない。町のホームページや北海道農業公社との連携により引き続き研修生を募集する考えである。

エゾシカやアライグマ等による農業被害が町内全域に広がってきている。特にアライグマは、平成二四年度に初めて捕獲されて以降、町内各地で捕獲されるようになり、農業だけではなく住宅地域の生

活環境にも被害を及ぼしている。町では箱罠を購入し、効果が高いと言われる春季における集中的な捕獲・駆除を呼び掛けており、今年は七月末時点で昨年を大きく上回る頭数が捕獲されている。この他、駆除に対する謝礼金の支払やわな猟・猟銃免許の新規取得経費の一部助成、電気柵整備に対する助成などの措置を講じて鳥獣被害の軽減を図っている。

〈取材後記〉

昨年の北海道の米の作柄は、六月中旬から七月中旬にかけての低温等の影響により、作況指数九〇と九年ぶりの「不

良」となった。こうした状況をもとめず、米ー1グランプリ決勝大会の最終決勝ブロックに進出したのは、すべて北海道米であった。

蘭越町で初めて米ー1グランプリが開催された平成二三年は、「ゆめぴりか」と「ななつぼし」が、北海道で初めて食味ランキングで「特A」を獲得した年でもある。蘭越町をはじめ多くの米産地や関係者のたゆまぬ努力で北海道米の評価は格段に向上した。もちろん府県産米も新たな品種を投入するなど巻き返しに出ている。

「府県や道内他産地と競い合いながら、生産技術の向上に努め、より安心安全で美味

しいお米を生産したい、北海道米も府県産米とともに消費者から高い評価を受け、将来にわたって安定した米づくりを守っていきたい」との蘭越町の生産者の熱い思いが、米の消費拡大につながることを切に願っている。



蘭越町役場には取材の対応や原稿の確認、写真の提供など多くのご協力を頂きました。心からお礼申し上げます。

一般社団法人

北海道地域農業研究所

特別研究員

三津橋 真一



淀川三叉路の花壇